

[連載]

博士課程生活講座! ～茂木さんに聞いてみよう～

第3回 時間の使い道

茂木俊伸

若手研究者から院生に送るエッセーです。ちょっと先輩の声に耳を傾けてみませんか？ 何か新しい世界が見えてくるはずです。

[企画]

院生時代に刺激を受けた本

大学院生応援企画「ビブリオバトル」

(2015年9月27日開催) より

日本語／日本語教育研究会では、2015年9月27日（日）に第7回研究大会のプログラムとしてビブリオバトルを行いました。テーマは「院生時代に刺激を受けた本」。当日、取り上げられた作品は以下の通りです。

広田照幸『教育言説の歴史社会学』

尾上圭介『文法と意味 I』

Rod Ellis 『The study of second language acquisition』

定延利之『認知言語論』

野矢茂樹『哲学・航海日誌』

ビブリオバトルに来られなかった人のために、ここでは各登壇者に報告を書いてもらいました。お楽しみください。

総務委員 岩田一成・建石始

第3回 時間の使い道

茂木俊伸 (熊本大学)

このエッセイでは、日本語学・日本語教育学分野の博士課程（博士後期課程）にいる人、または博士課程に進学しようと考えている人に向けて、若手（だと自分では思っている）大学教員が、自分の経験の中で「後輩たちの役に立ちそうなこと」について語ります。

1 はじめに

前回（第2回）は、就職のための業界研究に関するお話を書きました。今回は、第1回と同じような研究活動のデザインの話題に戻ります。

今回のテーマは、「大学院生のときに時間をどう使っておくか」です。大学教員が置かれている現状を踏まえて、「大学院を出た後にはできない（あるいは難しくなる）こと」を把握し、今ある時間を戦略的に使うにはどうすればよいかについて、考えてみます。

私自身、院生時代、先生方が「忙しい」とよく言われているのを見て、「何がそんなに忙しいんだろう？」と思っていました。大学教員になった今では、「（あの先生のあの年の）あの論文は、いつの間に書かれたんだろう？」ということの方が不思議です。そんな中、長い時間、私の議論の相手になってくださった先生方には感謝の気持ちしかありません。

2 大学教員はどれくらい研究時間を持てるか

さて、この大学教員の“忙しさ”を、データから確認してみましょう。

文部科学省が定期的に行っている「大学等におけるフルタイム換算データに関する調査」の最新の結果（平成25年度）によると、大学等の教員の1年間の「総職務時間」は、人文科学を専門分野とする教員で2,298時間（単純に52週で割ると、週44.2時間）です。実は、すべての分野の教員が法定の「労働時間」よりも長く働いているのですが（羽田2015: 3）、この調査の「職務時間」には大学外での仕事、例えば論文作成や学会出席、社会貢献なども含まれています。このうち「研究活動」の時間は、772時間（週14.8時間）です。

さらに、同じ調査の「大学院博士課程の在籍者」のデータも見てみましょう。人文科学分野の「総活動時間」（研究活動+学生としての活動）は、2,192時間です。乱暴ですが、先ほどの772時間と単純比較すると、就職後は、論文を書く、文献を読むといった勉強や研究に使える時間が3分の1程度に減るかもしれない、ということになります。

仮に同程度の活動時間を確保しようとするれば、プライベートの時間をどんどん削っていくことになります。しかし、子育てや介護といったさまざまな人生のイベントが発生する時期に入ると、なかなか簡単にはいきません。

では、将来的にこのような時間上の制約が生じるとしたら、院生時代に何をしておくべきでしょうか？ 例えば、空き時間や移動時間といった細切れの時間を仕事に有効活用する方法を目にするもありますが、今から「ビジネスパーソン」のようなテクニックを身につけるべきでしょうか？

3 まとまった時間の重要性

自分の経験から言えば、院生は「まとまった時間を使って、まとまった成果を挙げることに集中すべきだ」と考えます。仕事の効率化は後からでもできますし、仕事の基本を身につける前に効率を考えるのは順序が逆です。ある程度まとまった時間があるときに、まずは仕事の練習をしてほしいのです。

博士課程の最終的な「まとまった成果」は、博士論文です。逆算して考えてみましょう。博士論文は、そのパーツとなる各章のアウトプットを必要とします。各章の内容は多くの場合、個別の雑誌論文として書いたものを手直ししますから、一定の枚数（10～20ページ程度）の論文をまず書くこととなります。

そして、このような論文を書くためには、アイデアを生み出すための大量のインプットと、草稿やメモのような大量のアウトプットを必要とします。先行研究をざっと読む形のインプットは数十分でできるかもしれませんが、集中して書くアウトプットには連続した時間が必要です。また、メモをとりながら丁寧に文献を読むときにも、やはり一定のまとまった時間が必要でしょう。

庵（2013）にも「基礎体力」（同：157）や「貯金」（同：158）という表現が出てきますが、私も今の自分の仕事は院生時代にがむしゃらにインプット／アウトプットした経験に支えられている、と強く感じます。細切れ時間でも仕事ができるのは、まとまった時間を使ってした仕事の経験があるからです。したがって、院生のみなさんには、今の貴重な時間を、①インプットの“貯金”を作ること、②アウトプットの“回路”を作ること、に使ってほしいと思っています。具体的な方法は次回以降に見ていくとして、ちょっと抽象的な話になりますが、今回はそれぞれの意義について確認しておきます。

4 インプットの“貯金”を作る

脚本家の内館牧子氏は、修士課程の院生生活を描いたエッセイで次のように述べています（内館2007:127）。

文献を調べ、フィールドワークを重ね、「10」のデータを手にする。そこから自分の思考をめぐらせ、論点に沿って不要なものをそぎ落とし、さらにそぎ落とし、「1」に絞り込んで論文を書く。しかし、そぎ落とした「9」は、目には見えないが「1」の背後に豊かに存在する。

背後に「5」しかない論文は、目に見える「1」がやはり軽い。薄い。

忙しくなると、どうしても、目的のところだけ読む効率的なインプット方法をとりたいくなります。しかし、研究は、「入れた分を出す」ものではないのです（同じ理由で「勉強したことを全部書いた」ものも評価されません）。

自分のテーマに集中するのはいいことですが、インプットを限定するのではなく、いろいろなインプットをすべて自分のテーマに引きつけて考えることの方が、いい結果を生むように思います（→第1回参照）。私も院生時代に複数の先生から勧められたのですが、例えば、気分転換を兼ねて、違う分野や言語の研究成果に触れるのもいいでしょう。最終的には、自分の研究あるいは研究分野そのものを相対化して理解するための材料になるからです。

5 アウトプットの“回路”を作る

アウトプットに関しては、近年、執筆を習慣化する方法が話題になっています（シルヴィア2015）。なかなか書けない人は、1日のある時間帯を強制的に書く時間に当て、それを習慣として続けよう、というものです。

特に大学院に入りたての方にはピンと来ないかもしれませんが、勉強（インプット）に偏りがちになってしまう院生時代に、アウトプットの意識を持つことは非常に重要です。思考の深まりには、何かを書き、そこから考え、調べ、さらに書き、さらに考え……、というサイクルをどれだけ回したかが大きく影響するためです。書けなくなってしまった場合にも、今は書く内容がない（＝インプットに戻るべき）状態なのか、あるのに書けない（＝アウトプットを工夫すべき）状態なのかを判断し、自分で研究のサイクルに復帰できるようになる必要があります。

どのように／どれだけインプットし、どのように／どれだけアウトプットしたら研究成果の形になるのかは、分野にもよりますし、人それぞれです。しかし、「アイディアがなんとか形になった！」という何度かの経験が基盤になれば、「まとまった成果」は作れません。想像や何となくの

理解ではなく、体感が必要なのです。具体的なインプット／アウトプットのバランス調整の方法や仕事のペースをつかみ、客観的にも一定のレベルにあって自分でも納得のいく内容の成果を上げることができるように、しっかり練習をしておいてください。今それをしておかなければ、後に待っているのは「細切れ時間」です。

研究は孤独な営みですし、時には回り道をしているように感じられることもあるでしょう。しかし、院生時代は、周りの力を借りながら、時間をかけて、「自分の力で何とかする」ことができるようになるための訓練期間です。その特権を生かして、自分の成長のために一日一日を大切に使うてください。

参考文献

- 庵功雄 (2013) 『日本語教育・日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- 内館牧子 (2007) 『養老院より大学院 (講談社文庫)』講談社
- シルヴィア, ポールJ. (高橋さきの訳) (2015) 『できる研究者の論文生産術—どうすれば「たくさん」書けるのか』講談社
- 日経リサーチ (2014) 『大学等におけるフルタイム換算データに関する調査 報告書 (平成25年度)』文部科学省 <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/11/1353476.htm>
- 羽田貴史(編) (2015) 『もっと知りたい大学教員の仕事—大学を理解するための12章』ナカニシヤ出版